

信谷和重

経済産業省
近畿経済産業局前局長

「関西では日常生活の中に、過去がそのまま生きている。文化の厚みに圧倒されます」と話すのは、近畿経済産業局のトップを務めた信谷和重氏。

休日、古典芸能の舞台や仏閣に足を運ぶうちに、あることに気付いたという。文楽では、江戸時代とまったく変わらない義太夫の語りや人形の仕草に現代の人が涙を流す。能では室町時代に完成した幽玄な謡や囃、演者の舞に皆が固唾を呑む。お寺に行けば、千年以上前に造られた仏像がいまだに人の心を打つ。そうやって過去からの貴重な経験が生かされてきたからこそ、開放的な土地柄につながったのだと。

関西の中小企業の方々と話すうちに知ったこともある。多くの経営者は子息が30代になると代を譲り、本人は時間とお金を地元のために惜しまず使う。それが分かっているから、地元の人々が後継者を守り立てる。そんな好循環が生きていることにも感激する。

経済は循環するもの。関西が盛り上がり、東京との二頭立てで日本は再び力強く成長できる。その信念の下、信谷氏は大阪、関西に幸多からんことを願う。

撮影◎村田一豊

未来社会の実験場である 万博で披露した取り組みの 社会実装を進め、関西と日本の 経済発展の原動力にする

2025年4月から半年間にわたり開催された「大阪・関西万博」を機に、活気づいてきた関西経済。経済産業省の地方機関である近畿経済産業局は、関西の地から日本の未来を創るといふミッションの実現に向けて、関西ひいては日本全体の経済活性化に向けて職員一丸となって多岐にわたる政策を推進している。そのトップを務めた信谷和重氏に、世界が目する関西のポテンシャルと発展の可能性を聞いた。

省内の厳しい雰囲気 魅力を感じ官僚の道へ

伊藤 信谷さんは「大阪・関西万博」の開催を2年半後に控えた2023年10月に近畿経済産業局長に就任され、「関西から日本の未来を創る」というスローガンのもと、さまざまな取り組みを進めてられました。まずは信谷さんのこれまでの道のりからお伺いしたいと思います。

信谷 私は1990年に通商産業省（現・経済産業省）に入省したのですが、当時はバブル景気の真っ最中で、今とは就職活動もずいぶんと異なりしました。法学部の学生でしたので司法試験を受け

るつもりでしたが、友人に「国家公務員の試験を受けてみようよ」と誘われました。せっかく受けたのだから官庁訪問をしてみようと思って、いくつか回ったのですが、通産省に行くと、とぐろを巻いたようなオジサンたちがいっぱいいて、ここはアニメ『タイガーマスク』に出てくる「虎の穴」のような、鍛えてくれそうだな、ここでやってみようかなと思ったのです。

伊藤 ほかの省庁よりも通産省に、強く魅力を感じられたんですね。

信谷 そうですね。通産省という役所が困難な課題に率先して立ち向かう役所だからだと思いますが、職場に非常に厳しい雰囲気があって、面白そうだなと思いました。

そんな動機で入省しまして、もう35年になります。途中1995年から2年間、米国に留学させていただきました。ペンシルベニア州ピッツバーグにある、カーネギーメロン大学大学院（ビジネススクール）です。ここでは数学を使った経営学という最先端の学問をやっていたのです。95年ですから、ちょうど『ウィンドウズ95』が出たばかり。今というコンピュータサイエンスの走りの教育が行われていました。私は文系出身ですので、ついていくのに大変苦労しましたが、それでも授業の内容は刺激的で面白かったです。後の経産省の仕事にも役立ちました。

帰国してしばらくすると今度は2006年から2009年まで、英国ロンドンにある日本貿易振